

Topics

- ▶ 小川主任研究員が、9月9～11日にデンマーク ボンホルムで開催された「Ecoislands Global Summit 2013」で、「APEC Low Carbon Model Town Samui Island」について講演を行いました。
- ▶ 10月4日に開催する第9回NSR I フォーラム(通算309回)は、内藤廣氏(建築家/東京大学名誉教授)、岸井隆幸氏(日本都市計画学会前会長/日本大学教授)によるご講演「都市デザインのプロセス～変わりゆく渋谷を通して～」です。
詳細: <http://www.nikken-ri.com/forum/>



2030年のまちづくりに向けて

日建設計総合研究所 理事 上席研究員
朝倉 博樹

人口減少や少子高齢化、インフラの老朽化、エネルギー問題、財政の逼迫・・・と、現在の都市を取り巻く状況を概観しながら、これからの我が国の都市へと思いををせると、悲観的な気分になりそうである。しかし、これまでもそうであったように科学技術の進歩が、これからの社会、都市を大きく変えていくものと思われる。

■ ITがライフスタイルを変え、まちに求める価値が変わる

今から15年前を振り返ると、パソコンや携帯電話が普及し、インターネットなどITが身近に活用され始めた時期と記憶している。今やインターネットを利用したコミュニケーションは日常化し、スマートフォンで情報を入手、発信するなど、仕事や余暇など日常の様々なシーンで欠かせないものとなっている。

例えば、ネット上のバーチャル店舗で様々な商品を好きな時間に購入でき、医療や教育など様々なサービス分野でもITの活用が進んでおり、我々のライフスタイルをこれからも大きく変えていくだろう。

そうなってくると、まちに買い物に出かける際、品揃えや価格など経済的な視点から、「あそこは誰か、何かに出会う」「あそこの雰囲気が好き」といった、その場に訪れて体験できる「コト」が、場所を選ぶ上で重視されるのではないだろうか。

■ リアルな都市では、「場」が発する固有の魅力が重視される

すなわち、ITが進歩することで、現実の「場」が創り出す魅力が今まで以上に問われてくる。

経済活動の場としての価値のみならず、自己実現や社会とのつながりを感じる場として、多様なコミュニケーションの存在とそれを取巻く環境や仕組みの組合せが生み出す「場」の魅力はどう創り出すかが、これからのまちづくりに問われてくるのではないだろうか。

それはおそらく「〇〇銀座」や「△△の小京都」といった括りで語られるものではなく、その「場」が持つ固有のリソースが核となり創り出すものであろう。それぞれの都市が蓄積してきたストックは、長年の歴史の中で取捨選択されながら蓄積されてきたものであり、これからの経済、産業構造の変化の中でこれらのストックがどのような活用ができるのか? などについて思い描きながら、まちづくりのシナリオを構築し、レビューを繰り返すことが、今後のまちづくりに必要ではないだろうか。

■ 魅力の芯となる中心市街地のストックの再生

我が国の都市の中心部には、震災復興区画整理事業や戦災復興区画整理事業によりインフラが整備され、高度経済成長期に建てられた建築物が多数存在する市街地が多くある。

これらの市街地では、街区や敷地の規模が小さく、権利関係も複雑化し、建替えが進まず、空き室の発生や、大規模地震に際してのまちの安全性などが懸念されている。

一方、公共交通網や医療や教育など生活関連サービス機能の存在など、優れた立地条件を有するところも多くあり、これからの魅力ある「場」をつくる上で、このようなストックをどう再生していくかが、重要なテーマではないだろうか。

以下にストック再生手法の一例を示します。

○ 街区の再編や公有地の活用によるストックの再生

- ・小規模な街区の統合による環境空間と一体化した複合開発
- ・環境性能の高い建物への建替えなどによる優良なストックへの置換え
- ・公有地の活用などによる増加する高齢者や女性の社会進出を支援する機能の導入など、公共施設の再編



2つの街区の統合による業務・商業機能の更新や快適な歩行者空間を創出した再開発(出典:京橋二丁目西地区市街地再開発組合パンフレット)

○ パッケージ型のまちづくりプログラムの組成と実践

- ・安全・安心、環境など遵守すべき性能達成を前提にした、「魅力づくり」に向けたハードとソフト両面での大胆な規制緩和と優遇措置
- ・ワンストップ型の意思決定システムによるスピードアップ

○ ITを駆使した「見える化」によるまちづくりPDCAサイクルの構築

- ・ビッグデータを活用した人やモノの動き、まちへの評価・イメージ分析などによるマーケティング、レビューと改善・実行

こういったまちづくりは、構想から完成までに10年以上を要するものであり、2030年に向けた途に就くことは決して早くはない。



秋葉原は、終戦直後のヤミ市から家電の街、オーディオ、パソコン、今ではアニメ・ゲーム、AKB48へと時代とともに並ぶ店構えや集まる人々は変わり、大規模再開発やビルの建替えなどで徐々に姿を変えつつも、「ここにしかない」といった風情を感じさせ続けている街ではないだろうか。

神田祭の神輿の練り歩きだけは、変わらず続いてほしいものです。



編集後記 五輪開催が東京に決まり、経済効果が取り沙汰されていますが、お年寄りや子どもたちにとって、自国開催が日々の暮らしの大きな目標となり、「心への効果」は計り知れません。改めて招致に尽力された皆様に感謝したいと思います。また私たちは、五輪成功の一端を担うべく持続可能なまちづくりに情熱を注ぎます。(ハナ) webmaster_ri@nikken.co.jp

